

基本計画特別委員会 GREEN×EXPO みどり分科会記録

【 速 報 版 】

令和8年5月28日開会

速報版

- ・ この会議録は録音を文字起こしした初稿のため、誤字脱字がある場合があります。
- ・ 正式な会議録が作成されるまでの暫定的なもののため、今後修正されることがあります。
- ・ 正式な会議録が掲載された時点で速報版は削除されます。

横 浜 市 会

開会時刻 午後0時50分

◎ 開会宣告

- 川口広主査 これより基本計画特別委員会GREEN×EXPOみどり分科会を開会いたします。

審査に入ります前に、委員の皆様を確認をいたしたいと思います。

市第1号議案の審査につきましては、分科会では質疑のみ行い、意見表明は行わない方法で審査いたしたいと思います。

また、基本計画特別委員会委員長宛てに提出します分科会報告書につきましては、主な質問項目を局別に記載いたしますので、主査において取りまとめをし、提出をいたします。

以上、御了承願います。



◎ 市第1号議案（関係部分）の審査

- 川口広主査 それでは、脱炭素・GREEN×EXPO推進局関係の審査に入ります。

なお、当局からの発言に際しては着座のままで結構です。

市第1号議案（関係部分）を議題に供します。

市第1号議案 横浜市中期計画2026～2029の策定（関係部分）

- 川口広主査 当局の説明を求めます。

- 折居脱炭素・GREEN×EXPO推進局長 それでは、市第1号議案横浜市中期計画2026～2029の策定につきまして御説明をいたします。

この議案は、横浜市議会基本条例第13条第2号に基づきまして提出をするものでございます。議案書の33ページから95ページに記載されております。

中期計画素案は、令和7年12月の市会第4回定例会の常任委員会にて御説明をいたしました。

本日は、横浜市中期計画2026～2029（原案）（脱炭素・GREEN×EXPO推進局抜き刷り版）を使用し、御説明をいたします。

それでは、2ページにお進みください。

議決範囲の考え方でございます。原案のうち、現状と課題、目指す姿等をまとめており、本資料では、該当部分を黒い点線で囲んでございます。

右側3ページでございますが、当局の関連部分の目次を掲載してございます。

4ページにお進みください。

本ページ以降は、素案からの主な変更点について御説明をいたします。素案からの変更箇所は緑色の文字で記載してございます。当局に関連する箇所は黄色のマーカーで示しております。

政策群12、まちづくりについてでございます。

現状と課題といたしまして、郊外部のまちづくりを掲げており、その下段に記載の目指す姿とともに、素案からの変更はございません。

右側5ページを御覧ください。

施策群27、郊外部のまちづくりについても、素案からの変更はございません。

6ページにお進みください。

こちらは、政策・施策群体系図を記載しております。

8ページにお進みください。

政策群13、環境との共生についてでございますが、現状と課題としまして、カーボンニュートラルの推進、横浜グリーンエキスポを契機とした環共コンセプトの発信、横浜らしいサーキュラーエコノミーの構築・推進を掲げており、その下段に記載の目指す姿とともに、素案からの変更はございません。

右側9ページを御覧ください。

施策群28から30につきまして、素案から変更した指標4項目を赤枠で囲んでおります。いずれも素案では現状値を調査中としてございましたが、素案公表後の事業実績、または調査結果を反映いたしまして、現状値及び目標値を設定してございます。

10ページにお進みください。

こちら政策・施策体系図を記載してございます。

12ページにお進みください。

当局では、明日をひらく都市プロジェクトのうち、テーマ1、循環型都市への移行、及び、16ページまでお進みいただき、テーマの3、未来を創るまちづくりについて進めていきます。

テーマ1、テーマ3について、素案から大きな変更はございません。

続きまして、20ページまでお進みください。

コラムといたしまして、横浜グリーンエキスポについて記載しております。

素案公表時から取組が進んだことを踏まえ、記載内容や写真等は更新してございます。

22ページにお進み、右側23ページを御覧ください。

行財政運営のうち、当局では、取組4、特別会計・企業会計の更なる健全化を推進します。

素案からの変更はございません。

24ページにお進みください。

素案からの主な変更点につきまして、当局の関連項目が掲載されているページを抜粋いたしまして、マーカーを引いた一覧を28ページにかけて掲載しておりますので、こちらにつきましては後ほど御覧ください。

説明は以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○ 川口広主査 説明が終わりましたので、質疑等に入ります。

○ おさかべさやか委員 御説明ありがとうございました。

14ページ、とりくむサーキュラーのところのSAF、家庭用廃食油についてちょっと質問させてください。

私、これ同期の白井議員が熱心に勧めているということもあって、2023年の開始当時から、あの緑のボトルキャップの専用のを買って、せつせと近所の食品館あおばに運んでいる1人であります。

なので、ちょっと幾つか質問させてもらいたいのですけれども、身近ですぐ取り組めるいい施策だと思うのですけれども、これ現在どのくらいの認知度で、どのくらいの回収量があるのか、教えてください。

○ 岡崎脱炭素社会移行推進部長 認知度といたしましては、知っている、聞いたことがあるというのが大体92%ぐらいとなっております。

回収量は、2024年6月から直近のところまでで1万キロリットル程度となっております。

- **おさかべさやか委員** 9割認知度ということなのですが、これ事前にやり取りさせてもらって、eアンケートでの回答率だということで、eアンケートはもともと横浜市の施策を知っている人たちが登録しているので、ちょっとそれ数字のマジックではないかなと、横浜市全体の市民に聞いたときにどうなるのかなと、ちょっと疑問ですので、その9割を指標にしないほうがいいのではないかなと思います。

回収量について今お答えいただきましたけれども、これは全国的に見てどうなのか、他都市の状況はどうなのか、教えてください。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 他都市の状況、全てを把握しているわけではないのですが、JALと同様な取組をしている中では、全国的に見ても我々が一番シェアが広いということになっております。
- **おさかべさやか委員** ちなみに横浜市、2023年から始めていますけれども、この毎年の回収量というのはどんなような変化をしているのですか。上がってきているのですか、それとも横ばいなのですか。
- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今のところ右肩上がりなのですが、どんどん、延々とボックスを置くと、ずっと比例的に増えるということはちょっとないと思うので、場所の取り合い等もあると思うので、的確な場所に適正な数、置いていきたいと考えております。
- **おさかべさやか委員** ありがとうございます。

先日の基本計画特別委員会で、市長が世界の課題を解決する横浜と発言していたと思うのです。この取組、今横浜市が一番多いということで、もっともっと牽引していく必要があるかなと。回収量が一応増えているということは、認知度も一応2023年から上がっていったかと思うのですが、やっぱり9割を指標とせず、もっともっと認知度を高めていく必要があると思うのですが、どうやって高めていくのか、取組方法を教えてください。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今まで続けていたとおり、引き続き回収ボックスはどんどん置いていこうかと思っております。

それと、2つ目に、実際に回収ボックスを設置しているスーパーの方々と、認知度向上のためにポスターとか、配布資料を配ったりとか、その場所に、スーパーに来るということは何がしかの店もインセンティブが出ているので、何か一緒に連携して広める策というのができないのかというのは、これから検討していきたいと、そう考えております。

- **おさかべさやか委員** 認知度だけではなくて、その回収量の目標値とか、そういうのもあるのですか。現在の回収量が目標としてはどうなのですか。いいのですか、それともまだまだ少ないかと把握されているのでしょうか。そのあたり教えてください。
- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今始めたばかりなので、今まだ30か所弱ぐらいなのですが、今から広げていって、一応我々の持っている目標値というのは、先ほど申したとおり1万キロリットルというトレンドがあるので、そのトレンドを引いた目標値というのを設定させてもらっております。

その数値に基づいて、箇所数、それから場所というのを選定していきたいと、そう考えております。

- **おさかべさやか委員** ありがとうございます。

割と頻繁に繰り返し繰り返しあおば館に運んでいたのですが、うち結構、油物、2日に1回は油物をやるので油が結構出るので、やっぱり最近挫折し出してきていまして、こう達成感がない。やっている実感が湧かないというか、何に貢献できているのか見えないというのがあって、結局、飛行機は飛んだのか飛んでいないのかもフィードバックがなく分からないのですが、飛行機は飛んだのですか、それとも何回

飛んだとか教えていただきたいのと、このフィードバックがなく、やる気が継続できないこの状況についてどう対応していただくのか、お考えを教えてください。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 我々がJALと連携している燃料は、確実にSAFには変えていただけているので、航空燃料に使われていると思います。まだPRはできていないのですけれども、今1万キロリットルなので、大体東京から大阪まで往復できるぐらいの量は出ているのかなと。

今連携しているJALとも今後の普及啓発のやり方についてはさらに深めていって、市民の皆様にも満足してもらう事業にしていきたい、そう考えております。

- **おさかべさやか委員** ありがとうございます。

せっかくやっているこういう市民が続けられるように、やっぱり仕掛けをやってほしいのです。それがインセンティブなのか何なのかちょっと分からないのですけれども、何かアイデアは既にございますか。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 先ほどちょっと申したのと同様になってしまうのですけれども、やはりスーパーと連携してサステナブルに、スーパーにもメリットが出るように、市民にも実感していただけるようにということを、これからなののですけれどもちょっと考えていきたいと思っているので、しばしお待ちください。

- **おさかべさやか委員** ありがとうございます。

フィードバックはすぐにできることだと思うのですよ、もう東京一大阪間が飛びましたとか、やっぱり何かアクションを返してもらえるように、そのあたりはすぐに取り組みますので、よろしくお願いします。ありがとうございました。

- **古谷靖彦委員** 先日の特別委員会のところでもちょっと質問させていただいたのですが、先ほどのGREEN×EXPOのところとはかぶらない範囲でちょっと質問させていただきます。

GREEN×EXPOについて、やっぱり目標設定をしっかり立てるべきであると、私は思っています。何をレガシーにするのかということについて、例えば循環型社会、EXPOを経てどこまで進めるのかということであったり、あるいは園芸業界、私、よく土を触って花を買ってくるのですけれども、物すごくナフサ由来製品ばかり出てくるのですよ、その作業が終わると。肥料もそうですし。こういうところからの脱却というのを、例えばこの花博を通じて何か目標を持ったりとかしないのかなと、ちょっと今、やっぱりいつもそういうふうに取り組んでいるのですけれども、いかがですか。

- **折居脱炭素・GREEN×EXPO推進局長** 今、委員から御指摘があったとおりでございまして、我々はこの行動変容につながるという部分を大きくはターゲットにしていますが、まだ個々細かに、ではそのためにはどれくらい、具体的なところまで全部落とし込んでいるかということ、そこはないです。

ただ、今委員がおっしゃったような循環型社会ということは、例えば先ほどのSAFのような取組、行動が促進されているですとか、あるいはいろんな形でその行動が進んでいるというのは目標を持ってやるべきだと思うのですが、ただそれが一体、何万回とか何人とか、その具体性まで、今我々はなかなか持てないと。

これはそういう目標感を持ちながらも、そういうところに向かってやっていく、いわゆるどういった行動、あるいはどういった内容がこの循環型社会に結びついていくのかというのは、しっかり抽出をしながら進めていく必要があると認識しております。

また、ナフサ由来のようなものがいろいろと、いろいろなところで使われているというものをどうしてい

くかにつきましては、これまでそんな中東情勢というものもない中では、あまりしっかりと認識をしていなかったところがございますので、今回改めてエネルギーの大切さ、資源の大切さが中東情勢を踏まえて見えてきたところがございますので、その辺についても今後どういうふうにしていけるのかは、具体的なところはこれからしっかり考えていきたいと思います。

- 古谷靖彦委員 ありがとうございます。

農業もそうなのですね、農業も結構ナフサ由来製品ばかりだなと思っているのですけれども。だから、市民生活にとっても、園芸業界にとっても、農業にとっても、やっぱりGREEN×EXPOを経てこう変わっていったのだというのが、私はレガシーになっていくのではないかなと思うのですよ。

だから、そのときに、レガシーになっていくのだというだけではなくて、何がどう変わるのかと、具体的に今はこういう現状で、ここの現状からどう変えていくのかということ、やっぱり具体的に定めるというのが大事だと思いますから、ちょっと重なりますのでお願いしたいと思います。

もう一つ、目標問題なのですけれども、先ほど他の委員から有料入場者数の1000万人の話がありました。この中に、そもそもあれですか、学校招待、子供招待は入るのでしょうか。

- 五十嵐担当理事 1000万人の中には含まれております。

- 古谷靖彦委員 そうすると、有料というのがそういうことなのかと思うのです。

それとあと、ボランティアさんも、あるいは働く方、働く方というのかちょっとよく分かりませんが、がカウントをどうするのですかということについてどうなるのでしょうか。

- 五十嵐担当理事 ボランティアだとか、イベントに参加していただく方々は、当然、有料入場者数には含まれない形になっております。

- 古谷靖彦委員 有料には入らないけれども、入場者数には入るのですか。

- 五十嵐担当理事 来場者という概念でいけば、来たということをもって入るかもしれませんが、博覧会の運営上収支などに関わる重要なファクターである有料入場者数というところには入らないと。そこら辺の数字のまとめ方については、今、博覧会協会のところでも整理をしていると聞いております。

- 古谷靖彦委員 大阪万博のときには働いている従業員の数まで数えてしまったわけではないですか。それで人数が幾らだという発表をしていますから、そういうことなのかということなのですから、いかがですか。

- 五十嵐担当理事 いろいろな情報の出し方があると思っていますので、まず有料入場者数、それからお越しになった方、当然お越しになった方々の中で、イベントに参加したとか、ボランティアの方々の内数というものが分かるように発表する形で、しっかり公開していくことになると思います。

- 古谷靖彦委員 お願いしたいと思います。

そうすると、先ほどの有料入場者数1000万人、これでさっきのチケット代で掛けて運営費を賄っていくのだというのが仕組みだと思うのです。そうすると、結局有料入場者数のところに子供招待が入るのだとなれば、横浜市がやっぱりそれを出すわけですから、またここにも負担があるのかということがあります。もちろん意義もあると思いますので、そこら辺はちょっとどうなのとは思っています。

その一方で、あと今現在のチケットの売上げについてなのですけれども、これ計画どおりに今売上げが進んでいるのかどうか、伺います。

- 五十嵐担当理事 全体として1000万人の有料入場者数を上げるという計画があり、ただ、個々の月の、月

次の販売計画などについては、現在我々は聞いているわけではございません。全体として、協会としての販売目標は持っているかもしれませんが、それは販売戦略だとか個々の代理店だとか、いろいろなところに関わるものですから、我々としても承知している段階ではございません。

- 古谷靖彦委員 そちもちょっと不安なところなのですよ。それも前にその話を聞いたのですよね。それで承知していませんという話を。承知してなくて大丈夫なのかと逆に思うのですが、いかがですか。
- 折居脱炭素・GREEN×EXPO推進局長 その辺につきましては、今、GREEN×EXPO協会のほうにも働きかけをして、いわゆるチケットの販売状況をしっかりみんなで共有できるような仕組みをちゃんとつくりながら、それを公表し、そして我々もしっかりそれを把握して進めていくという方向で、今できないかということで調整をしております。

- 古谷靖彦委員 では、しっかり把握していただきたいと思います。

平原さん、ちょっと伺いたいと思います。

先日の委員会のところで、運営費について赤字を埋めるスキームはないと、局としては多分答弁していると思うのですよね。本当にそれでいいのかと。いろんな事業について、いろんなリスクヘッジだったり、リスクを抱えていることもたくさんあると思います。これから何が起こるか分かりません。そういうときに、そういうことを想定していないということのほうが、私は問題だと思うのだけれども、いかがですか。

- 平原副市長 こないだ市長も言いましたけれども、まず当たり前のこととして、赤字にならないように運営はします。ただ、国の閣議でしたっけ、閣僚会議でしたっけ、でもチケット販売をもって充てると、国は補填しませんよと明確に言っています。ですから、横浜市も当然負担する予定はありませんし、するつもりもありません。

そのリスクヘッジをどうするのかということですが、それはこれから運営、チケット販売もそうですけれども、まずやっぱり赤字にならないようにチケットをどんどん売って、あとはグッズを売って、ちゃんと運営費を稼ぐということがまず大事だと思いますから、それがイコール、リスクヘッジになるのだと、今は私は思っています。

- 古谷靖彦委員 それはちょっと無理がありますよ。もちろん赤字になってほしいなんて思っていないですよ、私も。赤字になってほしいなと思っていないけれども、でも何らかの原因、例えばですよ、大災害が起こるかも分からないではないですか。地震が起こったらどうするのですかと、そんな話ですよ。

そういうときに、リスクヘッジが何もないのですと、いやいやチケットの売上げをやるのが当然なのですよというのは当たり前のだけれども、そのことも、こういう場合はこういうことで検討しているのですということ、やっぱり国とも検討するべきなのではないですか。いかがですか。

- 平原副市長 大災害とか大地震とか、それは今想定していないですよ、はっきり言って。想定していません。

ですから、それはもし横浜で首都直下型の地震が起きてしまって大被害が出たら、EXPOどころの騒ぎではないわけですから、それは申し訳ないけれども、その時点で適切に対応していくのがリスクヘッジだと思いますけれども。

- 古谷靖彦委員 そこだけを捉えて今お答えになったのだけれども、やっぱり私は何らかの形で、その目標に達しなかったときにこういうふうにしていくのだと、こういうところで検討していくのだということは当然ながらスキームがあつて当然だと思っていたのです。それが無いというのは、ちょっと私はやっぱり問題

だと思いますから、もうこれ以上聞きませんけれども、ぜひそれを検討いただきたいと思います。

以上です。

- **二井くみよ委員** カーボンニュートラルに関して伺わせてください。

横浜市のこのカーボンニュートラルとかの取組というのは、国の地球温暖化対策計画とか、エネルギー基本計画と方向性が同じ、それに基づいて進められているのではないかなと認識しているのですが、まず中期計画に掲げているこのカーボンニュートラル、脱炭素管理の取組が、2013年度比での2030年度50%削減の目標、先ほど局長おっしゃられているような、これはいわゆる目指す姿の達成にどの程度寄与するものとして位置づけられているのか、伺います。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 基本的には2030年50%という目標に向かって実行計画という計画もつくっていますし、その計画に沿った数字を基に中期計画の数字も当てはめていくという方向性で、方向性は合っているということです。

- **二井くみよ委員** では、この中期にいろいろ指標もいろいろありますけれども、各掲げる指標ですが、取組がどの程度、今は現状、その2029年の次が2030年なのでもう待ったなしな状態なのですが、この中期が終わった2029年度時点で、2013年度比50%減という目標にどこまで迫っている予定なのかというのがちょっとこの中期で見えないので、それを教えていただいてよろしいですか。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今のところ、2028年とか2029年で幾つに行くというのは、そこは持っていないのですが、2030年のところで行くように真っすぐ直線で引いている事業もありますけれども、その後にカーボンオフセット等で急激にやっていく事業というのはこれから考えていかないといけないので、次の実行計画、例えば改定したり、中期見直すときにはそういった要素も入れて、2030年の達成を目指していきたいと考えております。

- **二井くみよ委員** ちょっと私、かねてからいろいろ質問させてもらっているのですが、これ例えばなのですが、横浜市の現行の地球温暖化対策実行計画の、例えば再エネの導入目標が、今のままだと2030年に達成する目標が2046年頃になるのではないかとということを以前申し上げたことがあったりですか、先ほど出ていたEVですが、これも横浜市の目標として2030年度までの目標が市内のEVを含む次世代自動車の普及割合として55%ということなのですが、直近、先日の説明の際に伺った数字ですと27%ということで、この5年間で市内の全ての次世代自動車の普及割合2倍にしていかなければいけない、私なんかは縁がちょっとないですね、ちょっとなかなか難しいと思うのですが、こういう5年間で2倍に増やせるのかというのはもう結構時間が迫っているし、2029年の中期が終わってしまうと、もうあと1年しかないという状態なので、もう少しこの中期自体にこうしたそもそも国の施策と照らしてやっているような事業についての進捗が見えるようにもう少し示していただけるとありがたいなと思っているのですが、その辺いかがでしょうか。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今、委員おっしゃられたとおり、確かに4年前につくったその実行計画のときのトレンドと確かに違うものがあるので、これから見直しをかけていかないといけないですし、直近の2028年、2029年にはまた見直しをかけて、各家庭部門とか運輸部門のプロポーショナルも変えていかないと。エネルギー転換部門の事業転換も図られているかもしれないですし、そこを見ながら大幅に改定していかないと、おっしゃられるとおり、非常に2030年の50%というのはすごくハードルが高いので、そういったことは必要だというのは、我々も考えているところです。

○ **二井くみよ委員** ちょっと副市長にも伺いたいですけれども、やはりこれは理想的な目標ではなくて、しっかり達成していく目標として捉えてやっていかれるのかという、その辺の意気込みを伺えたらと思うのですけれども、お願いします。

○ **平原副市長** もちろん意気込みはあるのですけれども、今、岡崎が言ったみたいにかかなり厳しい状況であることも事実です。50%届くか届かないかというふうなことで、これから残り数年で相当頑張っていけないといけないという状況があるのも事実です。

やっぱり、特に中小企業さんたちとか、あまり取組が進んでいない、あるいは家庭部門の割合がすごい多いのですけれども、家庭部門でもやっぱりまだ取組が十分ではない。それから、一番大きな大原則は、やっぱり原発なのです。原発が動くと、係数が変わってがっつと落ちるのですけれども、そこはいろいろ原発問題は、エネルギー政策というのは我々が立ち入れるところではないところもありますので、そこはなかなか難しいです。

ですから、あらゆる要素で今とても難しい状態になっておりますが、何とか50%は達成したいと思っておりますけれども、横浜市役所自体が市内で2番目に大きな排出事業者なのです。ですから、少なくとも他に範を見せる意味でも、横浜市役所だけは少なくとも50%は絶対達成したいと、そんな思いで、今、一生懸命取り組んでいるところですので、なかなかまた厳しい状況は御説明する機会もあると思いますけれども、決して目標を諦めているわけではないという状況でございます。

○ **二井くみよ委員** 分かりました、ありがとうございます。

すごい険しい道のりで、時間も限られているものなので、ぜひこの中期の進捗管理の際にもしっかりと見えるように、そうした大本の目標、目指す姿にどの程度達成しているのかというのがもう少し見えやすいような工夫をしていただけたらありがたいかなと思ひまして、要望いたします。

以上です。

○ **尾崎太委員** すみません、1点だけ。

この12ページの循環型都市への移行という話です。この中で、今回のこの中期の基本計画のポイントは、市民実感という言葉がずっと出ています。先ほどおさかべ委員がおっしゃった話はすごく大事で、やっぱり市民実感ができなければ、SAFの燃料を幾ら集めたって確かに達成感ないというのは思ったので、やっぱりそれは本当に飛行機が飛んだのであれば、そういうことを何かJALと協定して何か看板を作るとか、あなたのおかげで飛びましたよとか、こういうのはすごく分かりやすいだろう。そうすると、その市民実感というのは深まっていくと思うのです。

この循環型都市の一つの中で、これは西宮市でちょっとやっている取組というのが、これが阪神タイガースなのですけれども、甲子園球場でビールを飲んで応援しますね、皆さん。そのPETカップを回収して、それを再生して、阪神の応援グッズを売っているところの袋に変えて、これをグッズを入れる袋にして利用しているという事例があるのです。これは民間企業とも協力をしながらやっていて、これすごくいいなというか、本当にこの袋は、まさにそこで飲んだビールのPETカップがそういうものになっているという、応援する人も自分がビールを飲んでカップを出したら、それが再生利用されて、今度は応援グッズで戻ってくるみたいな、これはやっぱり市民実感だと僕は思っていて、こういったことを横浜もせっかくベイスターズもあるわけで、そういったことの取組のイメージ、西宮で阪神タイガースがやっているようなイメージは、市民実感の醸成につながると、私は思うのだけれども、局長、これどう思われますか。

- **折居脱炭素・GREEN×EXPO推進局長** 私もそのとおりでございます、今の委員方の御指摘なども伺いながら、例えばSAFですと、回収して入れるボックスの、あの緑のボックスのところに、まさしく今どれだけこれが活用されましたとか、アナウンスをやろうと思えばすぐにでもできることもあるかなと思っております。

それから、今、委員がおっしゃったような話でいきますと、私もいろんなものを例えば購入したときに、これは何々から回収してリサイクルで作っていますというものも結構見ると、それはそれで自分への実感として非常に湧いてくるという身近なことがありますので、やはり我々もこの施策を推進するに当たって、そういう身近な、本当にちょっとしたことでできることは、注意を払うというか工夫をして、我々が、職員がしっかり認識をしてアイデアを出せばできることはたくさんあるなと思いましたので、やっぱり全職員そういうマインドで進めていきたいと思います。

- **尾崎太委員** ありがとうございます。

分かりやすいというか、本当に市民全体といっても、これなかなか広げるのはそう簡単ではないので、本当に横浜はいろんなスポーツ団体とも連携を实际していますし、この機会を捉えてというか、このスポーツという分野から循環型都市の実感、市民実感ができる取組を、これぜひしっかり検討していただいて。

簡単ではないと思います。阪神タイガースも恐らく時間かかってやったと思いますけれども、せっかく横浜ベイスターズあるので、ぜひそういった前向きな、ベイスターズも社会貢献になる、ハマススタから出るものがそういったリサイクルがされれば、ベイスターズも社会貢献企業としての認知も上がるということで、ぜひこういった取組をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

- **おさかべさやか委員** 最後に、すみません、もう一回いいですか。

今ここにいる職員の方で、SAFの廃食油のボトルを持ってやっている方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。

なるほど。これがやっぱり認知度ですし、普及率がここでも見えると思うのですよ。この方々は全員挙げなければいけないと思うし、そうあってほしいと思いますので、よろしくお願いします。

- **梶村充委員** 運輸部門のやはりカーボンニュートラルに向けての率が高いですね、二十何%で。一番やっぱり大型トラックのカーボンが、あれを何とかしなければいけないというのはみんな分かっているのですよね。

トラックをEVにしようとしたら、これとても難しいということも分かってきて、やっぱりそれはFCVだろうということになっていると思うのですよね。その辺の記述はどこかに載っていますか。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 今、梶村委員が言われたのは、9ページのところで少しだけ……、すみません、そっちだった。

(「前の資料ではないですか」と呼ぶ者あり)

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** そうか。前の資料で言っているのですか。

前の脱炭素に向けた行動変容、イノベーションのところ、EV充電器の最適配置とやった、今日の御報告の中の9ページのところにちょっと記さして……、すみません、そちらではちょっと今、あの画面をちょっと、委員見ていただきたいのですけれども、今シェア率としては、運輸部門、言われたとおり21.6%なのですけれども、それを分析しますと、自動車が83%、その他鉄道と船舶というのがあるのですけれども、その83%のうちの55%がマイカーなので、まずはそのマイカーのところからやらせていただきたいと。

あと、委員おっしゃられたとおり、貨物というのも確かに長距離トラックというのめかなり出ていますので、そこはF C Vで対応しなければいけないというのは、我々も認識しているところです。

- **梶村充委員** 横浜にはいすゞの本社もあるし、そういうところとの協議をどんどん進めないと、どんどん遅れていってしまうと思うのですよ。やっぱり世界的にもF C Vというのはかなり進んでいるところもあるし、そういうところの、せっかく市内にあれだけのトラックの本社があるので、そことの兼ね合いとか、あと水素そのものをどうやって運搬するかという、川崎で日本鋼管の跡地に大きな工場を造っていますよね、岩谷産業が。そういうのとの連携もしていかないと、その運輸部門というのはちっとも減っていかないと思うのだよ。そこら辺をやっぱり、ちょっともう少しどこかで入れ込んでもらわないといけаниいのではないかなと思うのだけれども。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** おっしゃられるとおりで、そういったところも川崎市等と連携しながら、1号線にある水素ステーションは液体水素なので、川崎のものから引っ張ってくることもできるので、そういったところも連携しながら拡大させていきたいと考えております。

- **久保和弘委員** 今のところに関連しまして、御説明では運輸部門の割合が非常に高いということでありまして、一方、市内住宅の約6割が集合住宅であるということで、いわゆるマンション等ですね。そうになると、なかなかそこで充電するのは難しいということになると、この充電器を、急速充電器の数を増やしていくという、口数を増やしていくかと思うのです。この議論は、よく卵が先か鶏が先かのお話になって、いや車を先に普及させるのか、その充電器を先に普及させるかというお話になろうかと思う中で、様々御検討なさっているかと思うのです。

興味深かったのは、先ほどの前のところの資料でありますけれども、データ化、いわゆる可視化していくということで、これ本当面白い取組だなと思っておりました。いわゆるガソリンスタンドと同じように、1.5キロ範囲の平均距離に、この急速充電器を設置すると、また車が移動したところ、どの辺を訪れたのかという範囲を推計していくというお話がありましたけれども、なかなか今後期待できるのではないかなと思うのですけれども、その上で、こういうデータをこの民間事業者の方々としっかり連携して、やはり企業の皆様と進めていくということも必要かなと思うのです。この充電機器を設置する方々から。

そういう中でどういう取組をなされているのかということで、目標とかそういうのはあるのでしょうか。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 目標値といたしましては、2027年度までに400口つけていくということで、残り55口を効率的に使用頻度が高いと見込まれるところにつけていきたいと、我々のほうも助成金も用意していますので、ここにつけたらいいよというところが分かれば、営業も絞っていけるということなので、この事業を進めさせていただいて、効率的に事業を進めていきたいと考えております。

- **久保和弘委員** よく分かりました。

ということで、しっかり事業者ともいろいろやっているということでよろしいですか。どれぐらいの数をやっているのですか、それは。事業者は。民間事業者は。

- **岡崎脱炭素社会移行推進部長** 民間事業者は、車、日産さんとか、普通にいすゞさんとか、そういった事業者とは連携協定も結んでいるのですけれども、一番大きいのは、充電メーカーでシェアの一番広いe-Mobility Powerという企業と連携しながらやっていますけれども、公募補助金等は公平にどの会社でもお出しするという形でやっていますので、意見交換等も数多く重ねていますので、しっかり連携して事業者とやっていきたいと考えております。

○ 川口広主査 ほかにはよろしいですか。

他に御発言もないようですので、本件についてはこの程度にとどめます。

以上で、脱炭素・GREEN×EXPO推進局関係の分科会の審査は終了いたしました。

本日の分科会の審査は全て終了いたしました。冒頭で申し上げましたとおり、分科会報告書につきましては、私が質問項目を取りまとめた上で、基本計画特別委員会委員長宛てに提出をいたします。

今回の分科会の日程ですが、明日 5 月 29 日 金曜日、GREEN×EXPO みどり委員会終了の後、委員会室 5 において開会いたしますので、よろしくお願いいたします。



◎ 閉会宣告

○ 川口広主査 以上で本日の議題は全て終了いたしましたので、分科会を閉会いたします。

閉会時刻 午後 1 時 29 分

速報版